

チベット現代史の足跡 ——ギャロ・トウンドゥプ、朱丹夫妻の歩み

九州大学大学院比較社会文化研究院准教授

小林亮介

こばやし りょうすけ

2025年7月2日、チベット仏教の最高指導者

ダライ・ラマ14世が、90歳を迎えるにあたり声明を
発し、自らの死後も、輪廻転生に基づくダライ・ラ
マ制度を維持していくと明言した。ダライ・ラマ14
世の後継者選びについては、チベットの伝統を政治
利用しようとする中国政府の介入が予期され、日本
でも関心が高い。しかし、日本ではほとんど報道さ
れなかったのであるが、これに先立ち、ダライ・ラ
マ14世に関連する印象深い出来事があった。同年2
月、ダライ・ラマの次兄ギャロ・トウンドゥプが97
歳で他界したことである。彼は20世紀のチベットを
めぐる複雑な国際政治の表舞台、そして舞台裏でも
活躍し、亡命政府の要職を歴任した人物であり、そ
の計報は海外チベット人社会を中心に大きなニュー

スとなった。

歴代ダライ・ラマが統治したチベットは、195
1年に中華人民共和国に併合された。中国共産党に
よる支配が進む中、1959年のチベット動乱で政
権は崩壊するが、ダライ・ラマ14世はインド・ドラ
ムサラでチベット亡命政府を樹立した。ギャロ・ト
ウンドゥプは人民解放軍のチベット進駐から間もな
い1952年に、中共への反感からチベットを離れ、
長兄タクツェル・リンポチュエらと共に、米国の中央
情報局(CIA)の協力を得ながら、インドを拠点と
して抵抗運動に携わり、チベット本土で活動するチ
ベット・ゲリラを支えた。米国は共産圏の拡大を止
めるためにチベットに目をつけており、チベット側
もそれを利用する形で中国と戦ったのである。

米国の支援は、ニクソン大統領訪中(1972年)

へと至る米中接近の過程で打ち切れ、ギャロ・ト
ウンドゥプも抵抗運動から退く。しかし、彼は敵対
した中国からも一目置かれており、文化大革命が終
息した後、中国はダライ・ラマとの接触の機会を探
るきっかけとして、鄧小平からの内々の招きで、ギ
ャロ・トウンドゥプの北京訪問(1979年)が実現
した。中国はチベット亡命政府を承認せず、あくま
でダライ・ラマ個人との接触を試み、その実兄の仲
介を期待したのだ。その後も、中国とダライ・ラマ
との交渉過程で彼は存在感を発揮するが、しばしば
亡命政府との擦り合わせを欠いたまま中国と協議を
進めたため、亡命社会内部からの批判も多かった。
中共との対決と対話の双方に深く関わった彼の人生
は毀誉褒貶に富んでおり、その事績の検証には時間
が必要かもしれない。



朱丹の像[デキ・ドルカルというチベット名
で顕彰される](Tibetan Refugee Self Help
Centre, Darjeeling) 撮影:小林亮介

私は、今年2月にインド北東部ベンガル州のカリ

ンボンとダージリンを訪問した。ヒマラヤ・チベッ
ト文明圏の南端に位置するこれら二つの小都市は、
英領インド時代以降、チベット近現代史上の重要人
物たちが滞在・活動した地であり、ギャロ・トウ
ンドゥプの邸宅もカリンボンにある。彼の逝去を知っ
たのはインドに出発する直前であったが、カリンポ
ンの邸宅に弔問に赴き、仏壇の前に集まっていたチ
ベット人・インド人らとともに読経に参加する機会
を得た(死後49日間は供養が続く)。

私がこの滞在一層強く興味を覚えたのは、ギヤ
ロ・トウンドゥプの妻・朱丹の事績であった。ダー
ジリンで彼女が創設者となったチベット難民自助セ
ンターを見学したからである。ギャロ・トウンドゥ
プは1946〜49年まで南京に留学経験があり、蔣
介石夫妻ら国民党の指導者たちとも親交を結び、軍
の将領の娘であった朱丹と結婚した。1959年に
創設された同センターは、インドに流入したチベッ
ト難民たちの自活を支援するため、じゅうたんなど
チベットの伝統工芸品をチベット人自らが製造・販
売する施設として運営されてきた。センターの展示
室には、朱丹の貢献とリーダーシップを回想する写
真やパネルが並んでいた。中国と対峙したチベット
亡命社会の歴史の中でも、チベット人たちから慕わ
れ、尊敬を集めた中国人女性である朱丹の存在が光
彩を放っていると感じた旅となった。

時の調べ
Essay



略歴

専門分野はチベット近代史。筑
波大学にて博士(文学)。主要業
績:近代チベット政治外交史
―清朝崩壊にともなう政治的地
位と境界(名古屋大学出版会、
2024年)、「ダライ・ラマ14
世とその家族の群像」20世紀の
チベット」青山亨ほか編『アジ
ア人物史12:アジアの世紀へ
(20〜21世紀)』(集英社、202
4年)